



お誕生会

北野勇作

まるいケーキのまんなかに蠟燭が一本。

生まれたのは会社のフラスコの中。

あとになってそう聞かされた。

もちろんフラスコの中で誕生日を祝ってもらうことはできないから、一年目のその時にはもうちゃんと外に出ていた。

まわりには橙色や檸檬色や葡萄色、綺麗な色のビニールで身を包んだヒトたち。

忙しいヒトも忙しくないヒトもお祝いにかけつけた。研究員だけでなく、その日はなんと、社長もやってきた。

社長は暑がり汗かきで、顔の部分の透明ビニールはすでに内側から曇っている。

この服には空調装置を付けることにしよう。

社長が言うと研究員たちは笑い、拍手した。

ビニールが破けたりしないように気をつけて拍手した。

ぱしゃぱしゃぱしゃぱしゃ。

ビニールが鳴った。

それから社長が考えてきた名前を発表した。

クラゲみたいだからクゲラ。

クラゲ怪獣クゲラ。

皆拍手した。

ぱしゃぱしゃぱしゃぱしゃ。

だから、クゲラがクゲラになったのは、そのときから。それまでは、実験体四十二号と呼ばれていた。

実験体のなかで名前を与えられたのはクゲラが最初。

それだけ期待されていた。

社長から。

もちろん社員からも。

命名が終わると皆で歌った。

はっぴばーすでい　でいあ　くげら

はっぴばーすでい　とう　ゆー

ビニール越しのくぐもった合唱。

ぱしゃぱしゃぱしゃぱしゃ。

拍手のなか、クゲラは皆に言われるまま、ケーキの蠟燭を吹き消そうとした。

空気を取り込んで身体を膨らませ、それから、速度をつけて一点から噴き出そうとしたのだが――。

うまくいかなかった。

皆笑った。

もういちど。

誰かが言った。

もっとしっかり。

がんばれがんばれ。

もういちどやってみた。

すると今度は、空気かわりに違うものが出てしまった。ぴゅう、と針のように鋭く、それは宙を飛んだ。

クゲラが初めて発したその黄色い液体は、ケーキを隔てて真正面にいた研究員のビニール服にかかって、

ぱちぱちぱちと花火のような音をたてた。

研究員がなにか叫んだ。それから、手足をでたらめに振りまわして踊り始めた。

何人かの研究員が駆け寄って、何人かの研究員が飛び退いた。

駆け寄った研究員にもその液体はかかり、しゅうしゅうしゅうと白い煙が出て、彼らのビニール服に穴が開いた。

まもなく彼らも手足を振りまわして、狂ったように踊り始めた。

しゅうしゅうぱちぱち。

しゅうぱちぱち。

部屋のなかはたちまち真っ白。

それがクゲラの初めての誕生日会。

蝋燭が一本消えて――。

研究員が四人死んだ。

プレゼントされた部屋はすごく立派だったけれど、次の年の誕生日には誰も来なかった。

だからクゲラはひとりで歌った。

ひとりで歌っていると、また知らない液体が出てきた。

両方の目から噴き出したその液体がかかると、壁には大きな穴が開いた。

クゲラは歌いながら穴をくぐって部屋から出ていった。

皆のいるところへ。

そして、誕生日会が始まった。

去年よりもずっと多くのヒトたちがクゲラのまわりに集まって――。

全員で踊り狂った。

お誕生会

<http://p.booklog.jp/book/70351>

著者：北野勇作

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitanoyuusaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70351>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70351>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ